

「大地震必ず起こる」片岡、小菅、弘大教授



俊一教授



三陸沖北部では、マグニチュード(M)7クラスの地震が今後30年以内に約90%の確率で起きると予想されている。弘前大学理工学部

写真右は、小菅正裕教授。同左に課題や対策を聞いた。1968年十勝沖地震(M7.9)は、三陸沖北部で繰り返し起こるプレート境界型地震の一つ。平均発生間隔は約97年とされる。三陸沖北部では、この繰り返し発生するM8前後の地震のほか、1994年

三陸はるか沖(M7.6)のようなM7級の地震も起こる。「プレートの沈み込みによる地震なので、いつかは必ず起こる」と小菅教授。ただ、発生間隔が長いため経験が次世代に伝わりにくく、「地震や地域の歴史を全体的に教えていくことが必要では」と提言す

る。十勝沖地震では地すべりによる被害が大きかった。50年前に比べ、現代では「ゆれやすさマップ」などの情報が公開され地震に備えやすくなったが、片岡教授は「安心材料にはしないで」と念を押す。

また、十勝沖地震を機に建築基準法が改正された。片岡教授は今の基準で設計された家は倒壊しないとする一方「家の中の物が倒れたり飛び出たりしたことで負傷し、中には死亡した例もある。地震を念頭に住み方を考えてほしい」と呼び掛ける。

(太田佳希)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp